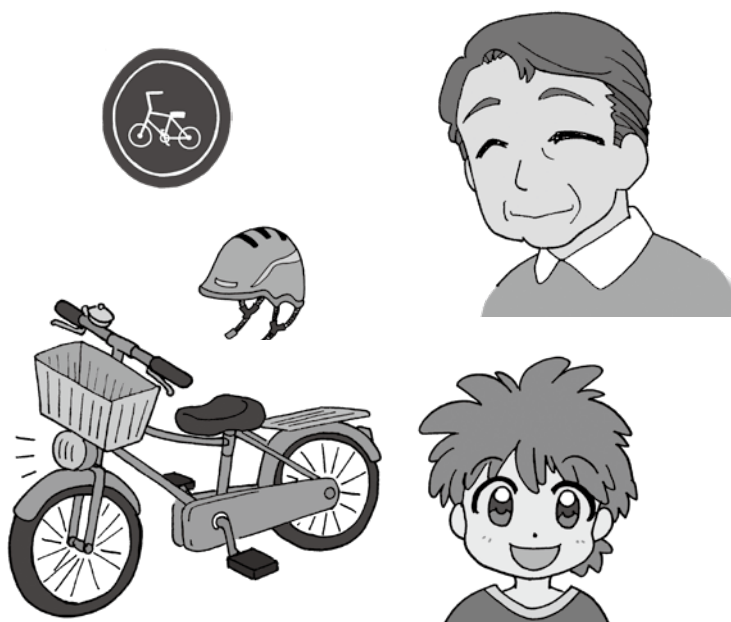


中学生の部



最優秀作 内閣総理大臣賞

広島県福山市立城北中学校

命を守るヘルメット

三年 新田 咲

僕は、中学校に入学し、自転車で通学しています。学校推奨の白いヘルメットを購入しました。ある朝登校時、ヘルメットをかぶりあごの下でカチッと音がするのを見ていた母が、「おじいちゃんを思い出すわー。」と言います。四年前に亡くなった祖父の事です。祖父は、家から近くの鉄工所に勤めていて、そこまではバイク（昔のスーパーカブ）で通勤していたらしいです。深緑のヘルメットにあごヒモの所をいつもきっちりしめて行っていたのが、とても印象的だったらしいです。近所の方々にも、安全運転は有名で、挨拶をよくしてくれる元氣な人だったらしいです。……らしいというのは、僕が生まれる九年も前に交通事故にあり、

車椅子生活になったからです。だから、僕は祖父の元氣な安全運転のバイクの姿を見た事ありません。それをとても残念に思いますが、母と祖母は、「生きてくれただけで良かった。ヘルメットのおかげなんよ。」と教えてくれました。事故については、いつものように祖父がバイクで通勤していて、交差点の青信号を直進していたら、暴走し右折して来た対向車に、はねられた形になったそうです。祖父は、バイクごと横転し、道路に投げ出され、縁石で頭を強打し、縁石にべっとり赤い血がついていてひどい事故だと分かったと祖母が言っていました。けれど、ヘルメットをきちんとかぶっていた祖父は、頭は強打したけれど、ヘルメットに守られて、骨折は頭も身体もしていても、幸い記憶力や言語力は守られていたそうです。だから、事故から、二十年、身体に障害は残ったけれど、生きてくれたので、僕達とも会う事が出来ました。事故当初は、母と祖母は相手への恨みや憎しみに苦しんだそうですが、（消える事はありませんが）その気持ちを祖父が回復するように応援する事だけに注ぐように切り換え痛みを耐え、リハビリを頑張る前向きな祖父の事だけ考えたそうです。一生寝たきりと言われていた所から、車椅子で生活出来るまで

回復し、母も祖母も、祖父が生きてくれている事が本当に支えになったようです。

その反面、祖父が昔のように元気だったら、一緒に歩いたり、走ったり、買い物に出かけたり……。ほんの普通の日常が過ごせていたのに……。ただ普通の日常を送りたかった……。と祖母が残念そうによく言っていました。

事故は、幸せな日常を壊します。ほんの少しのルールを守らない人がいたら、相手の人生もその家族の人生もまわりも変えてしまうかもしれません。その大変さを僕は、身近な人の辛い思いや経験で知っています。僕はまだ車の運転は出来ないけれど、将来車の免許を取ったら、正しく交通ルールを守って運転すると決めています。今は、毎朝あごの下で、カチツと音がするよう、きちんとヘルメットをかぶり交通ルールを守って自転車を運転する事を続けていこうと思っています。



優秀作

国務大臣・国家公安委員会委員長賞

香川県高松市立山田中学校

一年 片山 ほのか^{かたやま}

大切な家族の命を守るために

中学校に入学して、毎日自転車に乗るようになり、まだ事故に遭ったことはないが、雨の日に滑って転倒するなど何度か危ない思いをしたことがある。

そこで、今後事故に遭わないようにするために、また、私以外の家族が自転車や自動車で事故に遭わないために、交通安全について家族と話し合うことにした。

私の父は警察官なので、これまでに仕事で遭遇した事故について聞いてみた。父によると、交番勤務の時に様々な事故処理を取り扱ったとのこと、共通していえることは、事故には必ず原因があり、どちらかが交通違反をしたか、マナーを守っていないことが多いと教えてくれ

た。私も自転車通学に慣れてきたことで、「これくらいいいかな。」とルールを守らないといけないという気持ちが緩んでいることに気がついた。この気持ちの緩みが事故へと繋がるのだ。

もう一つ父が教えてくれたのは、単独事故以外は相手がいる交通事故で、その場合、自分の家族だけでなく、相手の家族も同じように辛い思いをするということだ。交通事故は殺人事件のように自分の意思で犯すものではなく、ふとした気の緩みから起きてしまう。わざとではないにしても事故の原因を作った方も、それが原因で事故に遭遇してしまった方も様々な悲しみや苦しみを抱えることになるだろう。私たち家族もどちら側にもならないために何が大切なのか話し合った。

まず、車や自転車に関係なく、出かける時は時間に余裕を持ってゆったりとした気持ちで運転することが大切である。全国的にみても、香川県は交通マナーが悪いことで有名で、毎年、交通事故死者数が多い。気持ちに余裕があり、譲り合いの心が持てれば、確実に事故は減るのではないかと思う。私はよく、時間ギリギリで家を出ることがあるので、これから、五分行動を意識して

いきたい。

次に大切なことは、自転車でも、事故を起こせば死亡事故につながることもあると認識し、自覚を持って自転車に乗ることである。まずは、ヘルメットを被ること、携帯電話を使ったりイヤフォンをしたりするなど、ながら運転をしないことを守って自分の身を守り、さらに、スピードを出しすぎないこと、飛び出さないこと、譲り合うことを守って他人に怪我をさせないように気をつけなければならない。

家族と話合って気づいたことは、両親は私や兄のことをいつも心配して見守ってくれていたということだ。母は毎日、「気をつけていってらっしゃい。」と見送ってくれていたが、それは、元気に帰ってきてほしいと願っているからだそうだ。そんな両親を悲しませないためにも、交通事故を起こさないために大切なことをしっかりと守って、安全運転で自転車に乗りたと思う。

鳥取県米子市立淀江中学校

二年 長谷川 竣はせがわ しゅん

油断したその先は

あれは、私の初体験でした。今でも思い出すと、心がドキドキします。

当時中学一年生の私は、小学校で六年間歩いてきた通学路を横目に自転車で通える喜びを感じていました。自転車通学にも少しずつ慣れてきた六月、朝の八時ごろ、いつものように自転車をこいで、学校にむかっていました。その道は、小学生と中学生がすれ違う通りです。私は前をいく友達を追いかけているうちに、友達のスピードは速くどんどん小さくなっていきます。私は諦めて、向かってくる小学生の列を気にしながらいきました。小学生に当たらないように、慎重に進んでいきます。横断歩道で止まり赤から青になり、小学生の列が渡りきるまで待ちいよいよ進もうとしたその時です。ペダルを一、二、三と踏んだ瞬間、右側から小学生が笑顔で勢いよく走ってきました。気づいた時には、私の体は

ななめになり、自転車が倒れないよう、支えるのに精一杯でした。私は何が起ったのか分かりませんでした。しかし、泣き声とともに、自転車のカゴがへこんでいることに気づき、その瞬間やつてしまった、と思いました。と同時に、私は何をしたら良いのかわからず泣いている小学生のそばで声をかけることに必死でした。ランドセルで小学校一年生であることに気づきました。私と同じで学校に慣れ始めた楽しい時期だとわかり、楽しい通学路を私が恐怖体験にさせてしまったと感じました。学校のチャイムが鳴り周りにいた小学生から、

「大丈夫です、さきに行ってください。」

と、言われその優しさに甘えましたがその反面ひき逃げ犯と同じではないか不安でした。

学校の先生に報告し、先生から言われた、「大丈夫か」の言葉に救われました。その日の内に小学生の保護者にも謝罪をし家族とも乗り方について話をしました。その時に自転車は、車と同じく車両なので特に気をつけないといけないということを学びました。

しかし私にとって辛い一週間が始まりました。あの事故からは、いつも以上にスピードをおとし、小学生の列

とすれ違う時には歩いた方が速いくらいの速度で進めていくようにしました。しかし、知らない小学生たちが私に指を差して、

「あの人つてあれだよね。」

などとうわさが広がってしまったのです。それが何日も続きました。登校している時に小学生とすれ違うと視線を感じ、日に日に指を差す人の数が増えていきました。本当に私だけが悪かったのだろうかとつらく、苦しかったです。でも、学校の先生たちに相談をし、対応をしてもらったおかげで以前のように通学ができるようになりました。

学校で交通指導があり警察の方より、改めて、歩行者からみたら自転車は車と同じであり、問題が起きてからでは遅いと指導がありました。私は、あの時を振り返ると相手が小さい一年生だった為、目線にはいっていなかったことを、思い出しました。もしスピードが出ていたらと思うとゾッとします。左右の確認の大切さ、歩行者優先、慣れた環境だからその油断に気をつけて、時間と心に余裕をもって行動をするように心がけています。

誰もが交通社会の一員

ぶつかる！咄嗟に両手でブレーキを思い切り握った。少し後輪が滑ったが、無事に止まることができた。しかし、自動車との距離はわずか三十cmほどしかなく、前かごに入っていたお弁当袋ははずみで飛び出してしまった。脇の下を汗がつたっていく感覚がした。これが冷や汗をかくということか。

学校までの通学路。自転車に乗ることがそれほど得意でもない私は、ゆっくりとペダルをこいでいた。自転車通学の高校生にどんどん抜かされる。しかし、焦ってスピードを出しては危ないと、自転車にしてはスローな走行だった。途中の信号の無い交差点で一台の車が合流しようとしていた。私が走行していた車線が優先道路だったため、迷いなくペダルをこぎ続けた。だが、車の前を通り過ぎようとした瞬間、車が前進してきた。慌てた私は、急ブレーキをかけた。これが冒頭のシーンである。

自動車も急ブレーキをかけたのだろう。自動車を運転していた人は大慌てで車から降り、私のお弁当袋を拾いながら駆け寄ってきてくれた。怪我はないか、自転車は壊れていないか、などを聞いてくれた後、怖い思いをさせて申し訳なかったと謝ってくれた。そして、私の横を走行していた自動車が自分に譲ってくれたため迷惑にならないように急いで合流しようとしたこと、自転車も止まるだろうと思い込んだことが今回の原因だったと何度も頭を下げていた。

帰宅後、このことを家族に話した。私は自分に全く非がないと思っていたため擁護の言葉を待っていたが、両親と姉からはそれぞれ異なった視点から注意を受けた。自動車を毎日のように運転する両親からは「自動車の運転手の思い込みや注意不足が原因ではあるが、自転車側も自動車が出てくるかもしれないと考えて止まることができるようにしておかなければいけない」と指摘を受けた。私と同じ自転車通学だった姉からは「自転車のスピードが遅いから止まると勘違いされたのかもしれない。それに、もし飛び出してきたのが自動車じゃなくて歩行者だったら、加害者になっていたかもしれないよ」と注意

優秀作

文部科学大臣賞

された。交通ルールを守っているつもりだったが、危険予測を怠り、交通事故にあうかもしれないことに気がついた。

交通ルールを守っていても交通事故を起こしてしまう、巻き込まれてしまう可能性がある。加害者だけでなく被害者にもならないようにするためにはどうすればいいのか。このことについても家族で話し合った。出した結論が「自動車、自転車、歩行者などの立場に自分を置いて交通ルールを厳守し、常に注意を怠らないこと」だった。あの時、私は自分のことしか考えていなかったのではないだろうか。優先道路という交通ルールだけを妄信し、自動車が自分をどう認識しているのか想像していなかったのではないか。歩行者が飛び出してくるかもしれないという注意が足りなかったのではないか。改めて自分の視野の狭さを痛感し、反省した。これからは、交通社会の一員であることを自覚し、交通ルールを守るだけでなくさまざまな立場から危険予測をすることを常に心がけていきたい。この意識が広がり交通事故が減っていくことを願い、今日も自転車で学校に行く。

愛媛県松山市立南中学校

思いやりの注意

二年 片桐^{かたぎり} 麻帆^{まほ}

私は、習い事等で、よく母の運転する車で送迎してもらいます。ほぼ毎日のことなので、その道中、様々な場面に出くわしたり、交通ルールを明らかに無視している人も見かけます。

雨がザーザー降っている日に、傘を片手でさしながら、自転車を片手運転している人。車より自転車が優先とは言え、出会い頭に一回も停止せず躊躇なく飛び出してくる自転車。そしてよく見かけるのが、イヤフォンを耳に付け、スマートフォンに夢中になりながら歩いていて、全く周りの状況が把握できておらず、車が近づいていることにも気付かず、車が追い越す時によりやく気付き、

驚いている人。

もし運が悪かったら、事故になりかねない状況でした。けれど、事故にはなっていないません。それはなぜかという、片方が未然に防ぐ行動をとれているからです。

だいたいの事故が起こる原因は、双方の不注意が重なってしまった時だと思います。

母は、運転中、危険な場面に直面すると、いつも私に言っていることがあります。

「相手側の注意もこちらがしてあげる気持ちでいてね。」

「相手の不注意もこちらがカバーするように。」

そうやって危険な状況でも注意不足を補ってあげれば、何も起こらず済むのだと教えてもらいました。

私は、交通安全とは、自分自身がルールをきちんと守り、それを行動で表すことで安全が確保できると思っていますが、それだけでは、安全は守られないと気付きました。

特に、まだ幼い子供や、高齢者の多くは、ルールを理解していなかったり、注意力が低下している可能性が高いので、こちら側が配慮し、周りがサポートしなければならぬと思います。

最近、自転車の交通違反に反則金を納付させる、いわ

ゆる「青切符」による取締りの導入を盛り込んだ改正道路交通法が二〇二四年五月十七日、可決・成立しました。信号無視や携帯電話を使用しながらの運転などが対象となり、二年以内に施行されるそうです。

私は今まで、あまり自転車を乗らず過ごしてきたのですが、高校生になると、自転車通学が始まります。新たに改正されたルールどころか、今まですでにあった自転車の交通ルールも知らないことがたくさんありました。

自転車通学が始まれば、朝はバタバタしてしまったり、睡眠不足の日だったり、その日その日のコンディションも違うので、毎日のように自転車を利用するようになる私達は、より安全に意識を高めていかなければならないと思います。

もちろん、それぞれ一人一人が交通安全の意識を持って行動することが一番大事ですが、少し心に余裕を持って、ゆずり合ったり相手を思いやる行動も、町全体の交通安全につながると思います。

独りよがりの交通安全ではなく、皆がその日道で出逢った相手のことを思いやれる、そんな社会になればいいなと思います。

佳作

警察庁交通局長賞

兵庫県神戸市立白川台中学校

一年 庄司 礎

もしあの時ヘルメットがなかったら……

僕の高校生の兄は、毎朝最寄り駅まで自転車で通学しています。兄は朝にせっかくセットした髪型が崩れるにもかかわらず、しっかりとヘルメットを着用して自転車に乗っていきます。僕の家の中は坂道が多く、急な坂道もあるので、自転車のスピードが出やすいため、とても慎重な兄は安全運転を心がけ、周囲をよく見て自転車に乗っているそうです。

ある朝、いつものように兄が自転車に乗って通学していると突然、前輪が回らなくなり前輪を軸にして後輪が浮き上がり、乗っている自転車ごと前転してしまいました。

リュックに入りきらなかった荷物をエコバッグに入れ

てハンドルにかけていたので、そのエコバッグが前輪に巻き込まれたことが原因でした。

兄はハンドルを握ったまま前転し頭から地面に落ちてしまいました。

兄がかぶっていたヘルメットは傷だらけになり、また顔を打っていたため鼻血が止まらず、顔や手の甲も傷だらけ、リュックに入っていたパソコンもへし曲がり、自転車も壊れてしまいました。

連絡を受けた母がすぐに駆けつけ病院に連れていき、先生に体中のレントゲンを撮ってもらったそうです。幸い骨折はなく打撲と首の捻挫や擦り傷だけで済みました。それでも痛みが酷く、痛みがひくまで一カ月くらいかかったそうです。

今回は他に通行人や車も通っていませんでしたので兄一人のケガだけで済みましたが、もし歩行者を巻き込んでしまっていたり、後ろから来た車にはねられたりして、もっと大きな事故につながっていたかもしれないと思うと僕はぞっとしました。

兄は自転車に乗って通学するとき、事故をした場所を通ると、今でもあの事故のことを思い出して怖くなるそ

うです。母も家族が家を出たあとに電話が鳴るとドキッとするようになったと言っていました。

もし兄がヘルメットを着用していなかったら……と思うと僕も本当に怖くなります。兄は頭を強打して死んでしまったかもしれません。物は壊れてもまたお金を貯めて買うことができるけれど、命はそうはいかないと命の大切さを改めて感じました。

僕も高校生になったら自転車通学するかもしれないので、ハンドルに物をかけない、また自転車に乗るときはマフラーやコートなどタイヤに巻き込まれないような服装を考えて乗ることも大事だと思いました。

さらに、自転車に乗るということは加害者にもなるかもしれないということをしつかりと頭に入れて乗らなければなりません。

今回の兄の事故を教訓に僕も交通ルールをしつかりと守り、事故を起こさないように気を付けて過ごそうと思います。

そして今の僕にできることがもう一つあります。それは、身近に起きたこの事故で感じたことや怖かったことを人に伝えることです。ただ怖かっただけで終わらせるのではな

く、ヘルメットの大切さ、家族も感じた恐怖、命の大事さをしっかりと友だちにも伝えていきたいです。

富山県富山市立水橋中学校

一年 廣野ひろの琥太郎こたろう

思いやりをつくる交通安全

僕は、夏休みに「交通安全」について、家族で話し合いました。家族一人一人が気を付けていること、通学路の危険箇所について話し合ったことを紹介します。

まず、僕自身が気を付けていることは、交差点では、左右の安全を確かめてから横断していること、歩くときは右側通行をし、前方から車が来たら、一旦停止をすることです。

小学生の弟は、三年生になり、道路で自転車に乗るようになってきました。弟が気を付けていることは、スピードを出さないようにすること、目と耳で安全を確かめることです。

父は、普段から車を運転する機会が多いので、道路を全体的に見て運転しています。高齢者や初心者が運転している車が前を走っていたら、いつも以上に車間距離に気を配っています。また、高齢者が自転車に乗っているのが見えたら、突然転倒することがあるかもしれないので、より慎重に運転しています。さらに、雨の日は滑りやすいため、晴れている日よりも慎重に運転しています。他にも、高速道路等を長時間運転するときは適度に休憩を入れながら運転するなど、天候や状況に応じて臨機応変に運転しています。車の運転をするということは、注意すべきことがたくさんあるということを知りました。

母は、小中学生の登下校の時間帯に車に乗るときは、突然子供が飛び出してくるかもしれないので、より注意しています。また、僕たちが登校するときは、できる限り玄関先で顔を見て、笑顔で「いつてらっしゃい、気を付けてね」と声をかけるようにしています。心の状態が歩き方にも表れると思うので、安全に登校し、安全に帰ってくるように気持ちを込めて言うそうです。

通学路については、危険箇所を確認し、実践していることを確認しました。用水路の近くは道幅が狭く、車が

通過すると落ちてしまう危険性があるため、周りに車がないか確認しながら通る必要があります。学校の近くの交差点は、車道と歩道を隔てるブロックがなく危ないため、なるべく車道から離れたところを歩くように心がけています。幼稚園の前は、送迎で車の出入りが多く、急いでいる人もいるため、特に注意して、手を挙げて自分の存在を知ってもらうようにしています。

今回、通学路には危険なところがたくさんあることを改めて確認し、弟にも気を付けるように話をすることができました。また、母が笑顔で送り出してくれる理由を知って、心が温かくなり、嬉しくなりました。僕もこれまで以上に笑顔で「行ってきます」を言いたいと思います。「交通安全」と「思いやり」はつながっているのだと思いました。

これからも通学路の危ない所を見つけたときは、家族や周りの人に伝えて、事故にあわないように気を付けたと思います。

群馬県前橋市立箱田中学校

一年 安原 思惟
やすはら しゆい

姉の自転車通学と交通安全

私の家族は、群馬県の静かな町に住んでいます。家族は四人で、お父さん、お母さん、高校二年生の姉、そして私、中学一年生です。

毎日、姉は自転車で学校に通っていますが、私は歩いて学校に行っています。

最近、姉が学校から帰ってきて、「今日、車にぶつかりそうになった。」と話してくれました。姉が自転車で通学路を走っていた時、急に車が曲がってきて、危うく事故になりそうだったそうです。私はその話を聞いてとても驚き、そして怖くなりました。姉が無事で本当に良かったと安心したもの、もし事故が起これていたらと考えると、とても不安になりました。

それから私は、姉が自転車通学することについて、もつと真剣に考えるようになりました。どうすれば姉が安全に通学できるのか、一緒に話し合おうと思いました。

まず、姉に夜道を走るときには反射材をつけることを提案しました。姉は「そんなに心配しなくてもいいよ。」と笑っていましたが、私はどうしても心配でした。夜道は暗くて、車から見えにくいので、少しでも安全にするためには、反射材が役立つと考えました。

次に、姉と一緒に通学路を見直しました。今まで姉が通っていた道は車が多く、狭い道でした。そこで、少し遠回りでも、車が少なくて広い道を選ぶことを提案しました。

新しい通学路を姉と一緒に自転車で行ってみると、前よりも時間は少しかかるけれど、車とすれ違うことが少なくて、安心感がありました。

お父さんとお母さんにも、姉が危険な目にあつたことを話しました。お父さんは車から見た夜の自転車の見にくさを話してくれました。お母さんは自転車から見た車の危険度について話してくれました。

家族全員で話し合うことによって、交通安全を見直すことも、とても重要なことなのだと感じました。

私はまだ中学一年生ですが、今後は私も自転車通学をすることになるかもしれません。その時は、今回姉と一緒に学んだことを忘れずに、自分の安全を守りたいと思います。

最後に、交通安全は、私たち全員が考えるべき大切なことだと思います。事故はいつでもどこでも起こる可能性がありますが、私たちが気をつけることで、それを防ぐことができるはずです。これからも家族と一緒に安全に過ごせるように、交通安全についてしっかり考えていきたいです。

東京都共立女子中学校

二年 阿部 帆夏
あべ ほのか

とみもまた

「とみもまた」これが我が家の交通ルールだ。

私は交通事故と聞くと歩行者が赤信号で横断して車にはねられるというイメージがあった。しかし五年前そのイメージを大きく変えた出来事があった。池袋暴走事故だ。青信号を渡っていた母親と子供が高齢ドライバーが運転する車にはねられた。ドライバーはアクセルとブレーキを踏み間違えたそうだ。私はこのニュースを見た

とき可哀想と強く思った。二人を生き返らせてあげて欲しいと何度願ったか分からない。高齢者は車の運転をするべきではないとも思った。しかしそう思っても二人が亡くなった事実は変わらない。日本から高齢ドライバーをゼロにすることはできない。ドライバーが変わらないのなら歩行者が変わるしかない。青信号でも車が突っ込んでくる今日。自分の身の安全を守るためにはどのような対策が必要なのだろうか。家族で話し合い一つの結論に達した。それが「とみもまた」である。

「とみもまた」は「止まる、見る、もしかして、待つ、確かめる」の五つの行動を指す。「止まれ」の標識がある場所ではもちろんだが標識や信号がない場所でも一時停止する。青信号でも左右、前後が安全かどうかを見る。もしかして自動車、バイク、自転車などが来るかもしれないという意識を持つ。心や時間にゆとりを持ち安全が確認できるまで車が通過するのを待つ。安全に横断、通行ができるかどうかを一度だけではなく二度確かめる。中でも私が特に意識していることは「待つ」だ。時間に余裕がないと車が少し遠くに見えていても走って渡ってしまう。信号が点滅していても渡ってしまう。周囲を確

千葉県柏市立柏中学校

二年 小柏おがしわ 奈帆なほこ子

安全へ繋ぐささやかな敬意

認せず信号だけ見て渡ってしまう。だから私は目的地に到着する時間から逆算して時間にゆとりを持って外出することを心がけている。これを実行してからは信号が点滅していたら次の青信号で渡ろうと自然に思えるようになった。青信号でも周囲を確認してから渡れるようになった。

交通事故の大半はドライバー側に責任があると思う。だがドライバーに責任を押し付けても失われた命や能力は二度と戻って来ない。自分は交通ルールを守っているから大丈夫。そう思っている人もルールを無視した車が突っ込んでくることもある。事実日本では毎日のように交通事故が起こっているのだから。自分の身を自分で守るにはどうすればいいのか。その答えの一つが「とみもまた」を実行することだと思う。自分が交通ルールを守るのは当たり前。それにプラスして周囲の状況を把握するのだ。

「とみもまた」が「おかしもち」のように日本中に広まってほしい。そうすれば涙を流す人が少しでも減少すると思うから。

運転席の母が、すまなそうな顔を見せる。

「そんなに気を遣ってくれなくても……」

と苦笑しながら、こちらに深々とお辞儀をしている小学生達に向けて、ぺこっと軽く頭を下げると、気分よさそうに先へ向けて再び車を発進させる。それは私がかつて暮らした町で、何度も心に刻んだ光景だ。信号機のない横断歩道の前で、気付いた車が停まってくれると、まずは一礼してから急ぎ足でそこを渡りきり、さらに振り返って「ありがとうございます」と挨拶をする子も稀ではない。そんな律儀な子ども達だからこそ、見守る大人達も温かく、歩行者の姿を逃さず停車するドライバーが多く見受けられた。豪雪で知られる山形・米沢の、人情味あふれる土地柄の表れだった。

所変わって、今の街はどうか。私は四年前に、東北暮らしからまた元の住まいに戻って来た。何でも揃って便

利な、程良い都会と感じるこの生活は、時に雪国恋しさを抱きつつも、結構気に入っている。四季を通じて特に不自由はなく続く日常はありがたい。しかし一つ、私にはどうしても受容しがいこの街の常態がある。それは、我が物顔で車の前を渡ってゆく歩行者達の姿だ。特に私の住む地域は大きな団地やマンションが建ち並び、子供の数も多い。だから行き交う車も歩行者も、互いにルールやマナーの遵守がより求められるところだ。しかしながら、私が一歩行者として、或いは車の同乗者として日頃察するかぎり、運転者を顧みない横柄な歩行者の振る舞いが、恒常化してしまっているのだ。

確かに、横断歩道は歩行者優先だから、ドライバーには一時停止して先を譲る義務がある。一方の歩行者は、その歩みを急がねばといういわれなどはなく、悠然と横断しても全く問題はない。ただ、より安全な交通を形づくる要として、やはり人の「心」があるのではないだろうか。JAFが行った二〇一三年の調査結果によれば、「信号機のない横断歩道における車の一時停止率」において、千葉県は三一・九%で、下から数えて十一位。対して東北六県の平均は五十%を超えている。私はその数

値を知った時、まさに自身の経験と重ね合わせて、大いに納得してしまった。

ゆったりした地方とは交通環境が異なる都会の人々に、一様に礼儀正しい歩行者像を求めるわけではない。けれども、忙しい往来の中にあっても、少しでも相手の背景を想像するゆとりが持てれば、独りよがりではなく、ちよつとした気遣いが見える行動に繋がっていくのではないだろうか。停車した目の前を、無遠慮にちんたら横断されては、思わず舌打ちも出てしまいそうだが、軽い会釈でもよい、歩行者からの心が伝われば、いささか暗れやかな気持ちでハンドルを握ることができるようだ。だから私は、ほんの微力ではあるが、驕らぬ謙虚な歩行者であり続けたいと思う。

埼玉県新座市立新座中学校

三年 新井 広子
あら い ひろ こ

一人ひとりから始まるもの

「一瞬のことだった。」と父は言った。角から急に出てきた車、バイクのブレーキをかける父、気づいた時には反対車線の道路に倒れていた。私が生まれる前、父は仕事場へ向かう途中で事故に遭った。角から出てきた車は父が走っていることに気づかず、そのままの速度で運転し、父が乗っていたバイクと衝突してしまった。父は救急車で運ばれ、病院で治療してもらった。右足の膝を骨折していることが分かった。また、ガラスの破片で大怪我を負ってしまった。この事故の話聞いた時は驚きが大きかったが、今、思うとこの事故で父が生きていられたのはヘルメットやジャケットの正しい装着ができていたからだと思う。

父はいつもバイクや自転車に乗る時、ヘルメットを入念に確認している。頭のサイズに合っているか、あごひもカバーがちゃんとつけられているかなど母や私が自転

車に乗る時も「もうちょつときつくしないと落ちてきちゃうよ。」と教えてくれる。しかし私は、小さい頃、ヘルメットを被ることに抵抗があった。なぜなら、ヘルメットをピツタリに被ると汗をかいて頭全体が蒸し暑くなるからだ。だから「ヘルメットを被ろう。」と言われても「被りたくない。」と言っていた。それでも「怪我をする」と危ないから被りなさい。」と言われ、その父の強い意志が命を守ることに繋がったのだと思った。父はバイクに乗る時ヘルメット以外にも冬は「ジャケツトや厚めの服」を夏でも「長袖」を着ていた。衝撃を直で受けるよりかは何かクッションのようなものがあつた方が自分への被害を小さくできるという考えも自分の命を守ることに繋がったのだと思う。

実際に警視庁が令和五年に公開した「二輪車の交通事故統計」によると二輪車乗車中の交通事故死者は全国で約二割、都内では約三割を占めており、自転車や四輪車よりも高い数値となっている。また、二〇一八から二〇二二年までの五年間で致命傷部位として割合が多かったのが頭部で約半分、次いで胸腹部が約三割となっていた。二〇二二年に起きた二輪車乗車中の死亡事故に

山口県下関市立木屋川中学校

三年 なかむら 中村 たすく 輔

決意の夏

おける約三割が頭からヘルメットが外れていた。これは、ヘルメットを正しく装着していなかったことが頭部に致命傷を負ってしまい死亡事故に繋がったと考えられる。私たちと事故は身近な存在だ。だからこそ、ヘルメットやジャケットを正しく装着して安全性を高めていくことが大切だと思う。

あの日、もし父がすっかりヘルメットとジャケットを装着していなかったら父も私も今はいなかったかもしれない。これからは父のように正しくヘルメットやジャケットを装着して、自分の命は自分で守れるようにしていきたい。また、正しい装着の仕方を沢山の人に発信していきたい。

一人ひとりから始まる交通安全の輪。一人ひとりの命も周りの人たちの命も守ることができるように。

祖父と叔父は交通事故で亡くなっている。祖父は昭和六十年の夏に、叔父は平成四年の夏に、それぞれ自動車運転による事故だった。

この八月、叔父の三十三回忌の法要があった。私は父から事故の様子を聞いた。叔父が運転免許を取得して初めての夏、友人を乗せて帰路に着く途中、運転を誤って道路から転落したらしい。同乗していた叔父の友人は、地元の方でよく知っている。毎年のように墓前に手を合わせにくてくれる。叔父も生きていてくれれば五十一歳になる。

自動車事故の原因は何か調べてみた。安全不確認、脇見運転、動静不注視、漫然運転、運転操作不適等、様々な原因があった。私はまだ自動車の運転をできる年齢ではないが、通学、習い事の行き帰りで毎日のように自転車に乗る。この自動車事故の原因は自転車にも同じこと

がいえるのではないだろうか。自動車でも、自転車でも、同じように運転には細心の注意を払わなければならない。自分は大丈夫という過信は、大きな事故を招くかもしれないと怖くなった。

家族で自動車や自転車での事故は他にもなかったか聞いてみた。父も母も高校生の時に自転車運転中に自動車との接触事故があったと聞いた。二人とも、幸いにも転倒だけで、大事には至らなかった。母は、ここから車が来るかもしれないと思いながら自転車を運転する必要がある、周りをよく見て予測することが大切だと言っていた。父は私に「KY活動」という言葉を教えてくれた。「危険予知活動」という意味だそう。建設会社に勤める父の業界では安全がとても重要なことらしい。安全に作業を進めるための重要な役割を果たすのがこの「KY活動」だそう。起こるかもしれない危険を予測する。私はそんなことはあまり考えずに自転車に乗っていた。いつ、どこで、どうやって事故が起きるかはわからない。でも、予測して防止することはできるはずだ。

祖母は夫と息子を交通事故で亡くし、少しでも交通事故がなくなればと、交通安全協会で通学路の安全を守る

ためにボランティアをしている。押しボタン式の横断歩道を通行する小中学生を、黄色のベストを着て、黄色の帽子を被り、黄色の旗を持って、登校を見守ってくれる。自動車が赤信号、歩行者が青信号になっているのに、猛スピードで通り抜けて行く自動車もいる。「おはよう。いつてらっしゃい。」と当たり前のように言ってくれるが、黄色の旗を伸ばしてくれることで事故を防ぐことができ、安心して横断できる。

身近な家族の体験を聞いて、改めて交通事故の恐ろしさを知った。今、安全に自転車に乗れることがありがたいと感謝するとともに未然に危険を予測すること、無茶な運転をしないことで、自分の身は自分で守らなければならないと痛感した夏となった。